

1. 生の技法の状況(pp.305-306)

✓ 2つの原理

①社会的・性的な同型性の原理と非対称的な能動性の原理

⇒諸種のアフロディシアとその各々の価値とを評価できるようになり、それらを互いに序列づけることができるようになった。

⇕

②振る舞いの原理

すべての社会関係の領野における結婚の独立性、種別性、特異性を特徴づけるもの

⇒諸種のアフロディシアを結婚関係のうちにのみ可能な限り排他的に位置づけ、配偶者間の義務のある種の相互性を求めるようなつながりを結婚のうちに位置づけた。

✓ 生存の技法

・自己自身の変容を可能にするテクノロジー

・振る舞いのモデルを受け入れ、行動とアフロディシアの価値づけに関する古い図式の活力を維持するために必要で十分な自己変容のテクノロジー

として、定義できる(と、前回話した)

↓フーコーの疑問:

なぜ、このように振る舞いのモデルを価値づけの体系に適合させることが必要なのか?

2. 価値づけの体系と振る舞いのモデルの分節点(pp.306-307)

✓ 価値づけの体系・振る舞いのモデル

両者の間には、両立不可能性がある

にもかかわらず、両者は一緒に維持される必要があるとされている

⇒「自己のテクノロジー」という新たな概念を導入してまで、両者の共存を維持しなければならなかった理由を理解する必要がある!

✓ 結婚生活のモデル

配偶者の生活の唯一性と排他性、安定した関係性を前提とし、夫婦を個々人にとっての根本的な関係の一種に、ひとつの生の形式に仕立て上げる。

✓ 貴族階層の大家族

結婚=同盟の体系

✓ 貧困階層の家族

結婚=夫婦の関係を中心組織される体系

⇒配偶者関係(二者関係)のモデルは、田舎から都市、恵まれない階層からエリートへ向かう下から上

の運動によって拡大したものだっただ。

例:セネカやプルタルコスらのテキスト

読み書きのできるエリート、経済的・政治的エリートに向かって書かれたもの

↓なぜ、貧困階層の考えが貴族階層に拡大したのか？その契機は？？

✓ 「競争の貴族」の弱体化

権力・・・諸家族を代表するきわめて少数の個々人のあいだでの戦いのプロセスによって行使

貴族・・・社会的な階層秩序を用いて社会領野一般における個人、家族、氏族の優越を用い、調整原理、モデル化原理、各人の振る舞いの原理として地位の違いを用いるような価値づけのプロセスに執着していた。

ヘレニズム君主の発展と、ローマ帝国の体系・・・「競争の貴族」を脅かし弱体化させる

⇒個々人の場所・地位が、宮廷という制度のなかで君主との関係によって定められることになった

3. 宮廷と官僚制(pp.308-309)

✓ 宮廷

君主の選択と決定から出発して、個々人の地位が定められるような手続きの場

差異化、個々人の価値づけは、宮廷が行うようになる

⇒差異化は、行政メカニズム(=官僚制の組織化)との関係を通じて行われる！

⇒結婚、配偶者の関係、私生活が宮廷と官僚制という空間によって変容。

⇒結婚＝同盟という関係が、経済的価値、政治的価値を失う！

✓ 宮廷(官僚制の組織化)の空間登場以降の夫婦関係

結婚は、夫と妻の間の関係とされ、能動性と社会一性の相関関係が価値づけられるように。

私的生活と社会生活を分かち、つなぐものとしての夫婦関係の誕生。

=プライベートという領域の誕生

能動性の原理・・・自己管理の原則として登場する必要性が出てきた

哲学言説・・・外から提示された振る舞いの様式を生き、受け入れることができるために、諸技術を提示し駆使。=自己のテクノロジーという概念の導入

4. 性の外的二重化と自己の自己に対する内的二重化(pp.310-312)

✓ 自己のテクノロジー

コード(男性・女性など)を主体化することを可能にするもの

婚姻を社会領野のなかで見出すべき最高の目的性として構成することでそれを価値づけるもの

男と女の平等、互酬性を、個人が自己自身になしうる能動性の最高の形態として価値づけるもの

①性＝地位

②性＝能動性(性＝関係、他者との実際的な関係としての性)

↓例:自己のテクノロジーにおいては・・・

社会領野の中では男性、配偶の二者関係の中ではオスにならなければならない。

性こそが個人が自己自身に講師する統御の対象とならなければならない、管理、制限としての能動性の対象とならなければならない。

＝性の二重化、自己が自己に対して行う内的二重化

5. 君主の放蕩という幻想(pp.313-319)

✓ 君主の放蕩

ギリシア人において、権力行使と権力を行使する人物の性的活動との関係という問題に対する配慮がもつ重要性が語られてきた(←自己のテクノロジーという概念が導入・発達する前でも)

例:暴力的で文字通り強姦的な性的活動を行行使するために権力を濫用する僭主

→若い時期に放蕩生活を送った人物が政治権力を行使することを法的に禁止

理由:売春の職に就いていたからではなく、女性性・受動性の位置に置かれていたから(＝他者の欲望に対して受動的でなびくような対象であったから！)

↓帝政ローマ時代の「放蕩君主」とは？

自己のテクノロジーを自己自身に適用しない人物

男性に対する地位としての性と、オスの性的活動とを混同する人物！

＝皇帝の役割において(＝他者に対する政治権力の行使において)、自らの性的能動性を用いて、政治的権威と性的活動とをつねに混ぜ合わせ、もつれ合わせる人物

＝自己の自己に対する統御を行わない人物であり、統御という形式で自己の内的二重化が見られない人物

例:妻のおもちゃになったクラウディウス、解放奴隷と結婚したネロ、宦官として去勢しているにもかかわらず路上で売春をしているヘリオガバルス(←この人が、最低な放蕩君主！とされた)

✓ 主体と主権者の関係

君主の放蕩に関心がある理由・・・主体(政治的な意味での主体・臣民)と主権との間にある関係とは何なのかという問いが見えてくるから

⇒個人という主体のなかに、主権という原理の根源を発見しようと努めることが 16-17 世紀以来の西洋思想の哲学的問題、法的問題、政治的問題に！

✓ 統治性

君主の他者に対する権力&主体としての君主による他者を統治し自己自身を統治する限りでの君主による自己自身のテクノロジーの問題

6. アフロディシアの主体化と客体化(pp.320-322)

✓ アフロディシア

ギリシア人・・・セクシャリテも、肉欲という考えもなく、あるのはただ、アフロディシアと呼ばれる一連の行為だけ。アフロディシア＝能動性。欲望の暴力のせいで、自己自身から逃れ去り、自己自身のコントロールを失ってしまうような行為であるという事実によって特徴づけられた行為の一類型

♯主体が自己の性について、社会関係の領野と同じ広がりを持つ地位の様態・婚姻のみと同じ広がりを持つ関係的な様態を定めるような自己のテクノロジーを決定した瞬間・・・

①アフロディシアは、行為としてだけではなく、個人に固有の一側面、一次元として自己の自己自身に対する永続的な関係としても提示されるようになる。

＝性的能動性が、主体化される！

②性的能動性という原理・根源そのものを、たえまない管理・観察の対象としなければならなくなる
＝自己自身を客体化することが問題となる！

7. 欲望の誕生(pp.322-326)

✓ 良心吟味

セネカやマルクス・アウレリウス・・・性を問題にせず、野心や怒り、振る舞いの反応を問題にする

自己のテクノロジー以降の良心吟味・・・管理する必要があることとされたのは、エピテューミア(欲望)

✓ エピテューミア(欲望)

アフロディシアにおける欲望・・・体液の蓄積の表明の一側面にすぎなかった。

⇒欲望＝快楽、身体メカニズム。

自己のテクノロジーによって切り出された欲望・・・行為・欲望・快楽の切り分け

⇒「私はなにに欲望しているのか」という問いへの移行

✓ キリスト教との関係

欲望・・・原始キリスト教の根本的要素となるものであり、その霊的技術のうちに見いだされるもの

情欲・・・性に関するキリスト教的なテクノロジー全体の基本要素、対象、現実の対象となるもの

欲望と、欲望の主体というテーマの登場

⇒自己と他者の統治性の歴史から出発して、いかに欲望という契機が切り出され、高められたのか。

そこから出発して、ある種類の自己の自己に対する関係が形成されたのか示す必要がある。

8. H松のまとめ

古代ギリシア・ローマにおいて、アフロディシアは身体・快楽・欲望・行為を一つのまとまりとして存在するものであった。この4つをどう扱うか、その欲望や快楽を否定することなくどのように自分で統御するかが、自己への配慮(*Care of yourself*)の問題とされていた。

しかし、官僚制というメカニズムや、自己のテクノロジーという新概念が導入されて以降、アフロディシアにおいてたんなる身体メカニズムの1つに過ぎなかった欲望という概念が切り離され、自分が何に対して欲望しているのか、欲望していることを絶えず客観的に観察、自己統治することではじめて主体として形成されるようになった。

9. H松のコメント

官僚制が結婚の意味を変えたということは理解できたが、自己のテクノロジーと官僚制との関係がイマイチよく読み取れなかった。どのような肩書きで、どのように生きることが社会的に良いことという明文化されたルールがあることで、自分が何を欲すべきかを統治する主体ができるということなのか？